

鎮信流茶道理念「知足」の現代的意義

安部直樹

概要

拡大しつづける現代社会にとって、いま最も必要とされるのは「知足」の理念ではなからうか。本稿では、「足るを知」らなくなってしまう現状とその現状に対する危惧を素描しようとした。また、鎮信流茶道理念「知足」の必要性の背景にも迫ってみた。

キーワード

過剰富裕社会、「知足」、鎮信流茶道、節約の精神

はじめに

戦後の日本は、物質的豊かさを求めて生産力の拡充に経済の力点を置いてきた。国民生活の豊かさは収入の豊かさにより保証されるというコンセンサスが形成された。こうしたコンセンサスは、生産力を増強し、生産・流通・分配の図式を高度化し、国民所得を向上させたのである。

昭和30年代、池田内閣により提唱された所得倍増計画は、日本経済の成長をめぐるしいものにした。しかし、際限のない豊かさの追求はやがて頂点に達し、オイルショックを経て、昭和60年代のバブル経済崩壊へと日本経済を導いたのである。バブル経済の崩壊により、日本経済は急速な不況・不景気の淵にはまりこんでいく。それはデフレ現象とも呼ばれるもので、いわば戦後一貫して追い求めてきた物質文明・経済至上主義の終焉ともいべきものであった。

経済的豊かさこそが、人生の幸福につながっていくという図式が崩れたにもかかわらず、当面の課題として経済の活性化が謳われている。経済的落ち込みが、人の不安感を増幅していくから、不安感の解消のためには経済を活性化しなければならないという古典的景気循環論への期待が社会を覆う。多くの企業がリストラを遂行し、合理化の中で企業の効率化を進めようと

する。こうした努力は再び利益の追求を行い、企業を活性化して個々人の所得の増加につなげようとするものである。

やがてリストラにより企業収益の安定確保が見込まれてくるならば、人々の可処分所得は上昇し、大量生産・大量消費の神話が復活する。企業は再び競争社会の中で活力を取り戻し、人々の心の空洞は拡大する。勞せずして利得を得ることができるバブル経済の再燃となっていくかもしれない。人間は目先の収入・利益が向上すれば、そのことにいつしか価値観を見出し、更なる収入をめざし、心身共に没頭していくサイクルを繰り返す。

これまで豊かさの恩恵に浴した日本人が、貧しさのなかで堪え忍ぶということは不可能にちかいたろうから、下降した景気を浮揚させようという認識は、そう間違っていない。景気の回復を求める傾向は当然でもある。しかしひるがえって、高度経済成長からバブル経済崩壊にいたるまでの間に、豊かさの頂点にたどり着いたわれわれは日々の生活のなかで充実感・満足感を得ていたのだろうか。むしろ深く潜行する心の貧しさや価値観の喪失に気付かなくてはならないときがきたとは言えまいか。経済的豊かさは、人生の幸福にはつながらなかったのでは

る。物質的豊かさは、人間としての気品の喪失をもたらしたにすぎなかった。

文化と経済

人間の欲望に際限がないということが、確かに社会を進歩させた源泉ではある。しかし、この欲望の無限性は人間の幸福の目標を微妙にゆり動かしていく。そうした際限のない欲望のひとつの具体的な形態が、物質的な豊かさの追求であった。しかしこれは、最終目的ではなかったはずである。物質的豊かさが、精神的豊かさを保証する基盤となるという構図からは、つぎの到達目標として「精神的豊かさ」の追求が肯定されなくてはならないはずである。心の安泰をもたらすものは物質的豊かさや高額収入ではなかったということが、戦後60年をかけて、われわれが学んだことであった。心の安泰は人間としての根本の安定感であり、幸福感につながる。私たちが働き、考え、追求して豊かさを求めるものは唯一、この幸福感を達成するためのものである。

資本主義社会が利益追求、完全競争の社会をめざすことは自明の理であるが、競争原理を核とした市場経済成立の背後には社会的責任の自覚がなくてはなるまい。人間の達成すべき目的は、単なる利益追求や競争原理ではなく、それらはあくまでも手段であり、気品の追求と精神の高潔さであることを忘れてはならない。人々が、ただ単に収入・利益の増進を求めるならば、いつしか心身の疲労と緊張感は極限に達し、むしろ心の貧しさだけが顕著になるだけである。

経済の向上・安定と人間の精神の安定は不可分であるとしても、この精神の安定を人生の価値観に据え置くことは重要である。このために文化の重要性が叫ばれる。生産や所得を物質主義と呼ぶならば、学問・学術など人間が精神の働きによって作り出した文化は、精神主義ともいえるものである。もちろん、精神の安定や高潔さは、宗教・絵画・音楽などにみられる文化的多様性と同様に多種多様であるが、茶道も

またそのひとつであるといえよう。

文化と経済は、一見対極の中にあるようにみえるが、決してそうではない。ヨーロッパの文化、中国の文化等、かつての文化はそうした文化を造り出す活動そのものが経済的活動であった。そして今も尚、遺跡という文化、絵画という文化などは、観光資源と名を替えて、経済的活動の対象ともなっている。茶道はそうした経済的活動とは一線を画し、精神の安定、心の充足をねらいとしてきたから、人々の間に深く浸透し続けているのである。

私利追求の限界と「知足」の必要性

かつての新古典派経済学の最も基本的な主張は、すべての人間が私利追求に専心して自由に行動すれば、経済はうまく機能するというものであった。このことを他の側面からみると、生産と消費は自然とバランスを保ちながらゆるやかに拡大するという牧歌的な前提があったといえる。経済規模は無限大に拡大するものではなく、ある特定の生産物は、その生産物量の範囲内で消費活動をとまなうという限定された枠をもっていたし、その生産物を必要とする人々にもある一定の限界があった。従って、多くの生産者がある一定の生産物を際限なく生産し続けるとすると、限定された消費が存在する限り、生産者は自己の生産物を全て売り尽くすという意味での達成感をもつとは考えられない。しかし、恐慌による生産量調整が強制的な社会現象として表れる場合を除いて、資本主義経済は無限の生産と無限の消費を前提としている。バブル経済の崩壊が示したように、無限の自己利益の追求にも一定の限界が存在した。資本主義経済の基本である自由競争は、必ずしも社会を健全な状態に保つとはいえないことが明白となった。

「知足」という精神文化の必要性に気付くべき時が来たようである。茶道の精神は、仏教、ことに禅宗の精神から派生している。「知足」の観念は、生産の自己抑制を可能とする。自己

の生産を抑えることは、他の生産者の存在をも生かしていくこととなる。自己利益の追求のみに走るのではなく、自己利益について「足るを知る」ことは、他の生産者の生産活動を保証するという意味を意味する。生産者相互の経済的共生が図れるのである。

日本は1990年代初頭にバブル経済の崩壊をみたが、バブル経済の続いた10年近くの間には拝金主義が蔓延した。つまり土地・株式・債権や各種の会員権が異常な値上がりを見せた。生産とは切り離された「物」が価格という衣装を身につけ、人々の間を華麗に乱舞した。人々が額に汗して生産労働に勤しみ、その労働の対価として賃金を得るといった基本的経済原則が無視された時代であった。人々の欲望が更なる欲望を生み、その際限のない欲望が貨幣を求めて徘徊した。生産活動をとまなわない土地・株式・債権や各種の会員権といったものの価格が、急速に上昇していったのである。

また急激な拝金主義は、社会的虚脱感をも生みだし、地下鉄サリン事件や生徒の教師殺害事件、宗教団体に関係する異様な事件の増加を招来した。人々の他者に対する無関心化が急速に進行し、若年者の無気力化も顕著になってきた。

確かに、私利追求を正当化する新古典派経済学的な価値観の浸透は、日本の経済を豊かにする役割を担った。しかし、その私利追求の価値観が浸透すると、利益率の大きな企業が利益率の小さな企業より優良であるとする認識が一般化する。企業の活動内容より企業の利益幅の方がグレードの高い企業識別指標として、クローズアップされる。また個々人においても、収入の多い人々が、社会で認知されるようになる。

私利追求の価値観を一般的とする社会にあっては、かつての武士道に見られるような誠実さ・真面目さ・誇り等の理念が後退していく。かつての日本の文化は、金銭欲や物質欲を最も嫌う文化であった。こうした日本文化が、高度経済成長期を経て、また1980年バブル経済を経て、大きく揺らいできたのである。これは、私

利追求の過剰さが生んだものである。この私利追求を人間の究極の目標とすると、社会は果てしない経済バトルの中に組み込まれていってしまう。

具体的数字でそのことを確認してみよう。

第一に、日本経済は急成長して巨大規模に達した。1955年に9兆円だった国民総生産(GNP)が、バブル経済最後の90年には426兆円と47倍になっている。平成不況下でも経済の巨大化は続き、GNP/GDPは95年493兆円、98年に502兆円を記録する。そして2003年9月現在ではややその巨大化は鈍化したものの、499兆円を超えている¹⁾。

第二に、比較長期にわたる円高ドル安傾向²⁾の故に、ドル相場で表現すると日本経済の巨大化は一層顕著になる。ドル表示の日本のGNPは55年240億ドル、米国の4000億ドルの6%だった。90年には3兆ドルへと125倍増。米国の5.5兆ドルの53%に膨らんだ。95年では5兆ドルに迫り、米国の7.1兆ドルの70%である。これは先輩先進国である英独仏3ヶ国の合計を上回り、日本を除くアジア諸国の合計の2倍を超える巨大さである。一人当たりのGNP/GDPをみると4万ドルに近く、2.7万ドルの米国人と1万ドル弱の韓国人を合わせるより大きな生産力を発揮していた。しかし、昨今の景気動向悪化を反映して、日本の一人当たりGDPは縮小してきた。かつて4万ドルに近かった値が、2001年現在で3万2千ドルとなっている³⁾。

第三に、現代日本の自動車保有台数は1995年段階に6,680万台であったものが、2004年1月現在で、7,763万台となっている⁴⁾。この数字は豊かさの指標ともなるが、環境破壊の指標ともなる。車に乗り、便利自由を謳歌し、快適な空間に身をゆだねるために費やした人間の労力は測り知れない。

これまで日本社会においては、新古典派経済学の私利追求原理ばかりが強調され、倫理は忘れられるようになった。経済学は現実を説明する役割をもつが、それと同時に現実の人間の行

動を変えることもある。倫理観は生活の利便性、富の増加によってかき消されてきた。私利の追求は、ヨーロッパではキリスト教思想の土壌のなかで、それなりの抑制効果もあり、バランスある経済成長をも促してきた。しかし日本にはヨーロッパのような確固たるキリスト教思想のようなものはなく、自然派生的な共生の観念があったにすぎない。そうした日本社会に新古典派経済学ならびに、消費こそが美德であるとする経済至上主義の理念が、際限もなく広がっていった高度経済成長が、私たちの生活を驚異的に変貌させたのである。経済至上主義の理念は瞬く間に人生哲学と表裏一体となっていった。

かつてアダム・スミスは18世紀の後半に出版した『道徳情操論』（米林富男訳、未来社、1969-70.）でも、人間のもつべき倫理性を述べている⁵⁾し、一方『国富論』（水田洋監訳・杉山忠平訳、岩波文庫、1～4巻、2000）では、自由競争市場における私利追求の正当性を「見えざる手」として論及している⁶⁾。この二つの論理は、一見矛盾するようにもみえるが、スミスにおいては、私利の追求は基本的倫理観を有する人間が行うことを前提としていたために、何のためらいもなく成立していたのである。

個人がある行動を起こすとき、その行動に対して第三者から同感が得られるように自己規制するとスミスは考える。同感とは、第三者がその行動に「ついていける」と感じることである。しかし、この同感という観念は、誰が見ても共感を得られるものでなければならない。

バブル期において、一夜にして土地価格の50%～100%の値上がりや、株や会員券が異常に高くなる現象は、第三者はもちろん、当事者においてもなんとなく違和感をもつもので、同感・共感をともなうものではない。

この新古典派経済学的な私利の追求という自由は、アメリカではキリスト教倫理観でそれなりに抑制されてきたが、日本ではアメリカのキリスト教土壌にあたるものが存在しない。そん

な日本に、この新古典派経済学的な私利の追求という自由が導入された。私利追求の自由は瞬く間に社会の隅々にまで浸透した。

しかし、社会全体に対しても、組織に対しても、倫理的信頼が重要であり、この信頼が同感・共感という共通認識をつくりだす。こうした共通認識をつくりだす基盤が倫理観であろう。その倫理観を培うのが日本古来の文化である。伝統的日本文化の精神が復活しなければならない。そうした伝統的価値観を基礎とした伝統文化の再興が必要となってきている。茶道の精神もその一翼を担えるであろう。

過剰富裕社会と節約の精神

さて、経済という語は economy の訳語として定着してきているのだけれども、この economy という語のもつ意味についていくつか確認をしておきたい。economy が、ギリシア語の「oikonomia 家政」という意味を語源とすることは、周知の説であったが、更にその奥には天の配剤、摂理、自然界の理法、組織、有機体、組織体という意味をも内包していた。ごく一般的な英語の辞書では、「1 経済・理財 2 節約・儉約 3 経済学 4 経済機構 5 天の配剤、摂理、理法、有機体組織」とある。このことから、節約・儉約の意を内包する天の摂理が貫徹した様を経済 economy と呼んでいることが納得される。さらに『広辞苑』によると、摂理とは「神が人の利益を慮って世の事すべてを導き治めること」であるから、経済 economy はただ単に一般的概念の生産、流通、消費などとどまらず、人間活動を包括的とらえる語であることが了解される。

ひるがえって日本では、安政5年（1859年）に、佐藤信淵は『経済要録』において「経済とは国土を経緯し、蒼生を済救するの義なり⁷⁾」と経済という語を定義している。つまり、経済はある一定の広さをもつ国土の範囲内で、食物、衣類を作り、生活することをいう。また、蒼生を済救するとは、「其境内の人民をして、の

患いなく、居所安寧なるを楽しましむるを濟と云い、各自に産業を勉勤せしめて、食物・衣類の余裕をあらしむるを救と云ふ⁸⁾とあるように、佐藤信淵は、人々が一定の生産労働に従事し、生活を安定することを経済と呼んでいる。さらに佐藤信淵は、

我家の経済学は、天地の神意を奉行し、世界の蒼生を済救すべきの大道なるを以て、上天の名威を畏れて、恭儉の二徳を修め奢侈放蕩の行を厳^{いまし}く警^{きよ}むることなるが故に、従来浮華洒落を好み、驕^{きょう}慢^{まん}に慣習^{ねた}ひたる人は皆其節を聞くことを嫉む。

と述^べ9)、安政の時代にあつての経済学はもともと居所安寧なるを楽しむという。そのためには、天地の神意を行い、自然を尊び、贅沢を戒めなければならないとしている。またつづけて、「茲に創業・開物・富国の三篇筆し、以て経済の大要を示す、……。先ず天地の神意を推察すべし、天地の神意を能く知り得て……。以て、天恵の万一に報ぜよ。」¹⁰⁾とある。ここでも「天地の神意を推察」という語がみられる。「天地の神意を推察」ということがどういう意味なのかを探っていくのは、学問の領域で言えば、宗教学、哲学の範疇に入ってくるのである。しかし、さしあたり経済学も宗教学や哲学の領域と無縁ではないということが了解されておけばよい。

また、佐藤信淵は、

創業とは開物の業^{はじ}を創むると云う、所謂開物とは、国土を経営し、物産を開発し、境内を豊饒にして、人民を蕃^{はん}息^{そく}せしむるの業なるを以て、即ち天地の神意を奉行するの事なり¹¹⁾ 近來はいずれの国も豪富なる民を尊敬して、甚だ貧窮なる民を輕蔑す、是大なる誤なり、何かんとなれば、貧民は国家の害を作すこと少し、然るに豪富なる民に

至りては、国家の禍を為すこと極て大なる者なり¹²⁾

とも述べている。

このように『経済要録』のなかで、佐藤信淵は経済とは民意を安定させ、豊かな国を作ることであると述べているのである。そうして、民意を安定させ豊かな国を作るためには、天地の真理を会得しなければならぬし、儉約を修めて、奢侈放蕩を戒めなければならない。質素・儉約の実現こそが、安定した社会を築く唯一の道であるというのである。

この質素儉約を現代の経済成長を主軸とする経済の動きと対比してみよう。私たちは日々より良い生活を求めて生きている。より良い生活とは、便利で快適で豊かな生活ということができる。この生活を求め、また維持していくためには消費者側からみれば、その快適な生活を達成するための収入を確保する必要がある。また一方で企業側からみれば、より良い製品を安価にたくさん生産することが求められる。潤沢な製品、それを購入することのできる財政力、この両側からのアプローチがあつてこそ、豊かな生活により近づくことができるのである。

しかし、この無限ともいえる成長へのメカニズムを次のように批判する経営学者もいる。馬場宏二は、

資本主義社会における主体である資本。その資本が根本的に帯びているのが、無限の蓄積衝動である。資本は何の為に活動するのか？ 利潤を上げるためである。何のために利潤を求めるのか？ 元本と合体して大きくなるためである。何のために大きくなるのか？ 前よりもっと儲けるためである。何のためにもっと儲けようとするのか？ 前よりもっと大きくなるためである……。この問答は果てしがたい。それはこの問答が、資本の本性が無限の蓄積 = 自己増殖以外ではあ

り得ないことを表現しているからである

と述べている¹³⁾。まさに資本の無限の蓄積は果てしがない。こうした無限の資本蓄積活動は、「資本蓄積そのもの 経済成長自体 が自然環境を根元的に破壊し、その回復を図る主体たるべき社会と人類の思考そのものを破壊することで地球を人類にとって生存不能の遊星と化する危険」¹⁴⁾を内包している。私たちはローマクラブが、『成長の限界』¹⁵⁾で指摘したように、有限である燃料を使い、また森林等の資源を使い尽くす。生活が快適になれば、食料も多くなり、寿命もどんどん延びていく。これがまた地球の環境を悪化させ燃料資源の枯渇化へ走らせていくのである。経済成長路線の限界を意識するとき、『茶湯由来記』¹⁶⁾で、鎮信が述べた「足るを知る」という知足の理念は21世紀においても、珠玉の輝きを見せるのである。

おわりに

茶道が本格的に歴史上に登場するのは、鎌倉時代ではあるが、茶が客をもてなす遊芸から、いつしか禅の教えを取り入れた道としての文化に変化していく。一碗の茶を呈するために、徹底して客をもてなす。そして、それはいつか主人と客人が一体となった主客不二の世界を創り上げる。主人が客の心を知り、客がまた主人の心を自己のものとする。この為には自己を捨て他と共にある、自他不二の姿が理想となってくる。

茶の理念を井伊直弼は「一期一会」と表したという¹⁷⁾。客を招く茶会はいつの時でも、一生に一回限りであるというひたむきさと真摯な気持ちで対処せよとの思いであるが、人が人として生きていくのは全てが「一期一会」であらねばならない。本日一日も二度とない一日であるだろうし、人との出会いも、日々の生活にも「一期一会」の精神は存在する。

茶道は宗教心をもたずさえている。社会も人間も宗教心を持つことが、人としての傲慢さを抑え謙虚さを生み出す。今までの経済至上主義

は時として、他人に対するおごり、自然に対する傲慢さが存在した。いつも自らを省みる慎み深さが、また人間の高い精神性を醸成していくのである。

茶は他面、大名や富裕な商人の唐物崇拜で自己の財力や権力を披露する場となり、豪華な茶道具による交遊の慰みだという指摘もある。そうした解釈をよそに、茶を禅と結びつけた村田珠光(1422年～1502年)はわび茶を開いた人である。珠光は大徳寺に参禅し、唐物への執心から離脱する道を開き、草庵の小座敷を尊びわびの審美観を初めて立てた人物である。彼は茶を

よき道具をもち、其あちわひをよくしりて、心の下地によりてたけくらミて、後までひへやせてこそ面白くあるべき也、又、さ八あれ共、一向かな八ぬ人躰八、道具に八からかふへからず候也、いか様のとり風情にても、なけく所肝要にて候

と述べ¹⁸⁾て、禅を加味した茶禅一味のわび茶を樹立した。この精神が千利休に受け継がれていくのである。茶のもつ草庵のわび茶には、物心両面の執着から解き放たれた境地が存在するのであり、そうした境地に至るためには「足るを知る」理念の会得が肝要となる。市場原理の貫徹する現代社会にあって、その対極にある一座建立の世界観を内包する「知足」の理念が人々のなかにバランスよく配分される必要がある。茶道という呼称からもうかがえるように、茶は道であり、「道」とは人間の生きる正しい道標を意味する。その道標には自己錬磨の思想が息づいていた。そうであるが故に、茶は遊びと揶揄されながらも600年もの永きにわたってその命脈を保持しつづけたのである。

そうして明治になると岡倉天心が『茶の本』を著し、茶を日本文化として再評価し、茶のもつ精神性を強調した¹⁹⁾。西欧の物質的生産力に呼応した日本文化の精神性の高さが茶や武士道

に求められた。そうした観点は、土道に心がける武士の茶のあり方としての武家茶あるいは鎮信自身の立場により正確に即していえば大名茶としての自己規定として、すでに鎮信の『茶湯由来記』のなかにみいだすことができる。

文武は武家の二道にして、茶湯は文武両道の内の風流なり。さるによりて柔弱をきらふ。つよくてうつくしきをよとす²⁰⁾

したがって、市場原理・競争原理の支配する現代社会の近代主義・物質主義の行き詰まりから脱却する指針を茶道は内包していると解するべきであろう。茶湯の道をとおして、人間関係の基本となる礼の習得が期待されている。「すべて此道をしらん人は、飽暖禽獣の戒まぬかるべし²¹⁾」ともいいうるほどに、「知足」の理念を基本とした茶道が内包する人間性向上の可能性は大きい。

鎮信流はこれまで茶道の地方一流派として社会的知名度が低く、従来、学問的考察の対象としては必ずしも正当に評価されてこなかった。しかしながら、たとえば今日隆盛を極めている千家茶道と比較しても、鎮信流には茶道流派として注目すべき特徴が数多く見られ、むしろ千利休に直結するような「古格」を保っていると考えられる。形式的な統一と点前の事細かな作法の集積として、外面的な規格の美を追究するのが多くの茶道流派の一般的傾向である。ところが、鎮信流では、そうした外面的形式の厳格さに対する要求が比較的薄い。たとえば茶花を活ける場合にも、ほとんどの茶道流派では「一花五葉」とか「一花三葉」というふうに、花の数、葉の数まで決められているが、鎮信流ではそうした細かな取り決めはない。むしろ花を活ける側、見る側双方の内面をこそ問題とするのである。外面の厳格さを求めるのではなく、内面の陶冶を求めているのが鎮信流茶道といえる。それは、創始者松浦鎮信が平戸藩の藩主と

して、「人づくり・国づくり」を課題としていた人物であったからでもあろうし、また、鎮信自身の幅広い知識と思想とを具体的に表現するものが茶道だったからでもあろう。

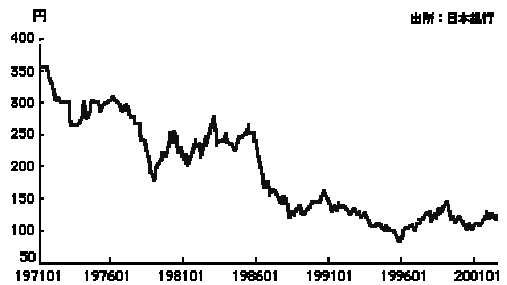
そうした鎮信の思想の中核に位置するものが「知足」の理念であり、「知足」の理念は現代社会が喪失したものを喚起させるのである。

追記

本稿は、国際観光学科共同研究「茶道・鎮信流の歴史的展開に関する基盤研究」(安部直樹、木村勝彦、田淵幸親、嶋内麻佐子)の成果の一部である。

注

- 1) http://www.mc-stat.com/stat/free/PCA51521.asp?KOMOKU_ID=060101 による。
- 2) http://www.nomura.co.jp/terms/ka-gyo/exchange_r360.html を参照。以下のグラフが円高・ドル安傾向を示すグラフである。



第1図 為替レートの推移

- 3) <http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/ecodata/gdp.html> による。ここでは、アメリカの一人当たり GDP は35,317ドルであり、韓国のそれは8,982ドルである。
- 4) <http://www.jaf.or.jp/data/carnum.htm> による。

第1表 平成16年1月末現在自動車保有台数

	登録自動車数	検査自動車数	軽自動車数	総計(両)
四輪車	52,125,396	52,125,396	22,274,240	74,399,636
三輪車	2,178	2,178	1,301	3,479
二輪車	-	1,393,814	1,828,464	3,222,278
計	52,127,574	53,521,388	24,104,005	77,625,393

- 5) アダム・スミス(米林富男訳)『道徳情操論』
未来社, 1969.
 - 6) アダム・スミス(水田洋監訳・杉山忠平訳)『国
富論(1~4巻)』岩波文庫, 2000.
 - 7) 佐藤信淵『経済要録』岩波文庫, 1969, p. 13.
 - 8) 『経済要録』p. 13.
 - 9) 『経済要録』p. 14.
 - 10) 『経済要録』p. 19.
 - 11) 『経済要録』p. 20.
 - 12) 『経済要録』p. 27.
 - 13) 馬場宏二「“経済成長”の初出」大東文化大学
経済学会編『経済論集』第81号, 2003, p. 80.
また, 馬場宏二は, 『新資本主義論 視角転換の
経済学』(名古屋大学出版会, 1997.)において,
現代社会を「恐るべき速度の経済成長を続けた挙
げ句, 資本主義は遂に大衆的過剰富裕時代に突入
した」(同書, p. 331.)として, 「過剰富裕は, 個
人レベルと地球規模レベルとの二側面から挙
証し得る. 個人レベルの問題は個人的に処理出
来るが, 地球規模の問題は, これまで人類が自覚
せずに済んでいた, 自滅の危機という解決困難な
課題を突きつけている. それは近代社会や近代思
想に対しても本格的な自己批判を迫るものであ
る」(同書, p. 331-332.)と警告している.
 - 14) 馬場宏二「“経済成長”の初出」大東文化大学
経済学会編『経済学論集』第81号, 大東文化大学
経済学会, 2003, p. 79.
 - 15) ローマクラブ『成長の限界』ダイヤモンド社,
1972.
 - 16) 松浦鎮信『茶湯由来記』(松浦素『茶湯由来記』
浪速社, 1969, 所収)で鎮信の茶道理念は展開さ
れている.
 - 17) 世界文化社編『名茶会再現』世界文化社, 1995,
p. 208.
 - 18) 村田珠光『珠光古市播磨法師宛一紙』千宗室
『茶道古典全集第3巻』淡交社, 1977, p. 3.
 - 19) 岡倉覚三(村岡博訳)『茶の本』岩波文庫, 1997.
 - 20) 『茶湯由来記』p. 31.
 - 21) 『茶湯由来記』p. 30.
- 引用文献・参考文献・引用 web
1. http://www.mc-stat.com/stat/free/PCA51521.asp?KOMOKU_ID=060101
 2. http://www.nomura.co.jp/terms/ka-gyo/exchange_r360.html
 3. <http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/ecodata/gdp.html>
 4. <http://www.jaf.or.jp/data/carnum.htm>
 5. アダム・スミス(米林富男訳)『道徳情操論』
未来社, 1969.
 6. アダム・スミス(水田洋監訳・杉山忠平訳)『国
富論(1~4巻)』岩波文庫, 2000.
 7. 世界文化社編『名茶会再現』世界文化社, 1995.
 8. 村田珠光『珠光古市播磨法師宛一紙』千宗室
『茶道古典全集第3巻』淡交社, 1977.
 9. 岡倉覚三(村岡博訳)『茶の本』岩波文庫, 1997.
 10. 佐藤信淵『経済要録』岩波文庫, 1969.
 11. 馬場宏二「“経済成長”の初出」大東文化大学
経済学会編『経済論集』第81号, 2003.
 12. ローマクラブ『成長の限界』ダイヤモンド社,
1972.
 13. 松浦鎮信『茶湯由来記』(松浦素『茶湯由来記』
浪速社, 1969, 所収)
 14. 馬場宏二『新資本主義論 視角転換の経済学』
名古屋大学出版会, 1997.
 15. 松浦章『松浦鎮信の茶』講談社ベック, 2002.
 16. 千宗室編『茶道古典全集(全巻)』淡交社, 1962.
 17. 桑田忠親『日本茶道史』河原書店, 1976.
 18. 吉川・丸山・西田・辻校注『日本思想大系36
荻生徂徠』岩波書店, 1973.
 19. 頼惟勤『日本思想大系37 徂徠学派』岩波書店,
1972.